

# 県立耐久高校所蔵「耐久梧陵文庫」の保存と活用

玉置 将人

## はじめに

和歌山県立文書館（以下「文書館」と略す。）では、県内各地に所在する貴重な資料を未来に伝える取組の一つとして、平成三十年（二〇一八）十二月より、「和歌山県歴史資料アーカイブ」サイトを運営している<sup>1</sup>。当初は、文書館で所蔵する資料を中心に公開してきたが、令和元年（二〇一九）度からは他機関の所蔵資料にも対象範囲を広げ、県内の学校や公的機関の協力のもと調査と収集を進めてきた。

その成果の一つとして、和歌山県立耐久高等学校（以下「耐久高校」と略す。）が所蔵する「耐久梧陵文庫」のデジタル化を実施し、令和二年（二〇二〇）十一月五日の世界津波の日に合わせて当サイト上に公開した。同校

は、「稲むらの火」で知られる濱口梧陵らを創設者とする学校であり、令和二年が梧陵の生誕二〇〇年の節目にあたることから今回の調査・収集対象となった。

「耐久梧陵文庫」は、長年同校に受け継がれてきた江戸～明治時代の版本を中心とする三、四六六冊に及ぶ古書籍の総称である。資料の多くは、明治期に活躍した実業家・政治家で、耐久学舎舎長も務めた濱口容所（東濱口家九代吉右衛門、文久二年～一八六二）～大正二年（一九一三）の旧蔵書をはじめ、地域の有力者らが学校に寄贈した書籍である。

これらの資料は、平成二十八年（二〇一六）度より、高校、大学等の研究機関、文書館などの連携により行われた整理作業の結果、全蔵書の目録データが完成したことで検索が容易になり、広く利用が可能となった。

筆者は、平成二十五年（二〇一三）四月から令和二年

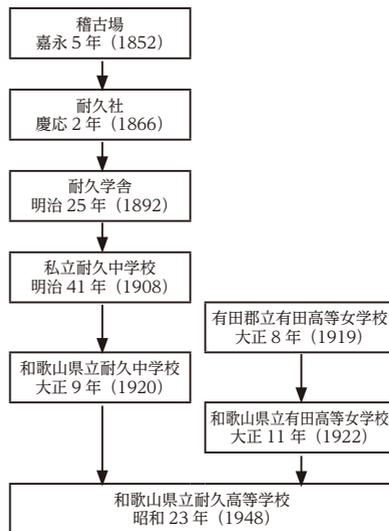
(二〇二〇)三月まで耐久高校で地理歴史・公民科の教諭として勤務し、その間これらの事業の担当として資料整理等に携わった。令和二年四月からは県立文書館に配属となり、現在は学校との連携や歴史資料の教育利用等にも取り組んでいる。昨今、学校所蔵資料の保存・活用に関する論考や企画展等が増え、当分野に関心が高まっている。<sup>(2)</sup>そこで本稿では、「耐久梧陵文庫」の資料整理の経緯やその内容、活用に向けた取組についてまとめること、今後の学校所蔵資料活用の一助としたい。

## 一 資料整理の経緯

耐久高校は、嘉永五年(一八五二)、濱口梧陵、濱口東江、岩崎明岳の三氏が紀伊国宍粟郡広川村(現有田郡広川町)に開設した「稽古場」に端を発する。慶応二年(一八六六)には、永統を願って「耐久社」と命名され、明治二十五年(一八九二)に「耐久学舎」、明治四十一年(一九〇八)に中学校令により「私立耐久中学校」と改称された。大正九年(一九二〇)には私立から県立に移管し、「和歌山

県立耐久中学校」となった。その後、戦後の学制改革により、昭和二十三年(一九四八)に「和歌山県立耐久高等学校」が成立し、現在に至っている(図1)。<sup>(3)</sup>

【図1】耐久高校の沿革



「耐久校史」より作成

こうした変遷の中で、同校には寄贈や購入によって形成された大量の古書籍類が受け継がれてきた。これらの書籍は、長年校内一階の倉庫で木箱や中性紙箱、段ボール等に収納して保管されてきた。しかし、数量が膨大かつ未整理の状態であったことから、学校関係者の間でも全体像を把握できない状況が続いていた。

転機となったのは、平成二十七年(二〇一五)、同校が

学校特色化の取組として、校史に関する資料の収集・展示等を目的とした校史資料室「耐久史学館」を開設したことがある。これをきっかけに、学校の歴史を見直す動きが活発化し、未整理のままとなっていた蔵書の活用が目指されることになった。

同年九月、同校から相談を受けた文書館職員によって初の本格的な調査が行われ、学校との協議の末、内容把握のために全点の目録を作成することが決定した。整理作業にあたっては、多くの人員を確保する必要があったため、同校同窓会の支援を得るとともに、資料整理に専門的な知識を有する和歌山大学橋本唯子准教授に協力を依頼し、同大学生も参加して行われることとなった。耐久高校でも生徒ボランティアを募集し参加を呼び掛けた。

平成二十八年（二〇一六）八月七日に行われた第一回の作業には、和歌山大学橋本准教授を中心に、和歌山大学生六名、耐久高校同窓会員七名、教職員五名、生徒五名、奈良文化財研究所研究員一名、文書館職員二名の計二十七名が参加した（写真1）。

作業前の段階で、資料を納めていた箱には無関係の書

籍が混在するなど、原秩序はすでに失われていた。そのため作業は、まず全体を洋装本（洋綴本）と和装本（和綴本）とに大別したうえで、内容ごとに書籍をまとめ、新たに



【写真1】資料整理の様子

登録用の番号を付箋に書いて本に挟むことから始まった。目録作成にあたっては、本の表題・年代・著者・発行者・形態・蔵書印などの情報を記した調査を作成し、同時にパソコンでのデータ入力を行った。

その後、翌年二月十九日まで計六回にわたり作業が進められ、全点の目録が完成した。整理後、これらの資料群は、創設者の濱口梧陵にちなんで「耐久梧陵文庫」と名付けられた。

ちなみに、「梧陵」の名を冠してはいるものの、「耐久梧陵文庫」は濱口梧陵の旧蔵書ではないということに注意しておく必要がある。梧陵の旧蔵書は、「濱口梧陵文庫」と呼ばれ、西濱口家が所蔵していたが、明治末期に私立耐久中学校に一時移管された後、昭和初期に西濱口家に返還された。<sup>(4)</sup>その後、平成二十四年(二〇一三)に、西濱口家から梧陵の旧蔵書約五、七〇〇冊が「濱口梧陵文庫」として県立図書館へ寄贈され、現在に至っている。これらは、本稿でとり上げる「耐久梧陵文庫」と区別して扱わなければならない。<sup>(5)</sup>

無事、資料の整理を終えることができたが、従来の保



【写真2】資料の保管状況

管場所は校舎一階であったため、津波や洪水等によって資料が浸水被害を受けるおそれがあった。そこで整理後の現在では、資料は安全な高さが十分確保できる校舎三階の部屋に移され、出納可能な状態で適切に保管されている【写真2】。

以上のように、耐久高校では学校の理解・判断や識者によるアドバイスにより、長年未整理の状態となっていた資料が適切に整理・保全されることとなった。また、これらの整理作業が、専門家の指導のもと多くの学校関係者や生徒も参加して

行われたことで、学校に所在する資料の価値が広く共有されることにつながったといえる。

次章では、資料整理及びその後の調査で明らかとなった「耐久梧陵文庫」の概要について述べたい。

## 二 「耐久梧陵文庫」の概要

「耐久梧陵文庫」は、耐久高校に受け継がれた三、四六六冊に及ぶ古書籍類の総称である。当文庫の書籍は、その由来と時期によって大きく次の三つに分けることができる。

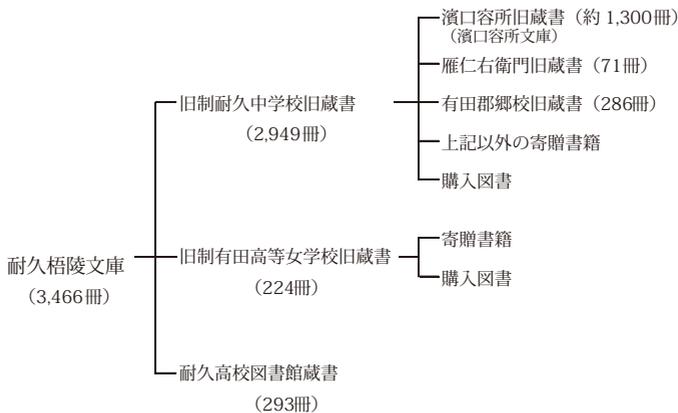
### ① 旧制耐久中学校旧蔵書

### ② 旧制有田高等女学校旧蔵書

### ③ 耐久高校図書館蔵書（戦後）

すなわち、①・②が戦後、新制耐久高校へと引き継がれ、さらに③として新たに購入した図書も加わって、当文庫が形成されたといえる。それぞれの冊数については、【図2】にあるように、旧制耐久中学校旧蔵書が二、九四九冊で圧倒的に多く、全体の約八五パーセントを占

【図2】「耐久梧陵文庫」の構成



〔注1〕 書籍に捺された蔵書印や書入れ等による推定

〔注2〕 各冊数については、今後の調査によって変動する可能性がある。

めていることがわかる。また、旧制有田高等女学校旧蔵書が二二四冊、戦後に加えられた耐久高校図書館蔵書は

【参考】「耐久 梧陵文庫」にみられる主な蔵書印

〔寄贈者関係〕



安斎郡郷覺図書之印  
(有田郡郷校)



馬埜氏図書記  
(雁仁右衛門)



御風楼主人  
(濱口容所)

〔学校関係〕



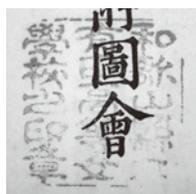
私立耐久中学校図書



私立耐久学舎図書之章



耐久社印



和歌山県立有田高等女学校  
之印章



和歌山県立耐久高等学校  
蔵書印



耐久中学校図書之印

〔その他〕



松阪学問所



学習館記

二九三冊となっている。

次に、書籍を形態別に分類すると、洋装本が五九三冊、和装本が二、八七三冊となる。洋装本は明治・昭和期の刊行物で、学校図書館の蔵書として購入または寄贈されたものである。内容としては、『群書類従』、『国史大系』、『史籍集覧』などの叢書が主で、『紀伊統風土記』、『南紀徳川史』など和歌山に関する資料も含まれている。

和装本は江戸初期～明治期の版本で、そのほとんどが地域の有志から寄贈されたものである。さまざまなジャンルの漢籍・和書がみられるが、特に四書五経に代表される儒学の経典や史書など漢学関係の書籍が充実している。<sup>(6)</sup>

本章では、特に多様な書籍を含み、当文庫の大部分を占める旧制耐久中学校旧蔵書に絞って内容を詳しく検討していきたい。

### 三 旧制耐久中学校旧蔵書について

前述のとおり、「耐久梧陵文庫」のうち大部分を占める

のが旧制耐久中学校旧蔵書である。現在確認できる二、九四九冊のうち、約八八パーセントが和装本でそのほとんどが寄贈書である。これらはそれぞれ異なる由来をもっているが、蔵書印などによりある程度来歴を推定することができる。以下では、来歴が判明するものうち規模が大きく、特に注目すべき濱口容所旧蔵書（濱口容所文庫）、雁仁右衛門旧蔵書、有田郡郷校旧蔵書について解説したい。

#### (1) 濱口容所旧蔵書（濱口容所文庫）

東濱口家第九代当主で、明治期に実業家・政治家として活躍した濱口容所（吉右衛門）の旧蔵書である。これは特に「濱口容所文庫」と呼ばれ、大正二年（一九一三）に容所が逝去した後、子の濱口無悶（十代吉右衛門）が当時の私立耐久中学校に寄贈したものである。<sup>(9)</sup>

容所の蔵書印「御風楼主人」が捺されているものは現時点で一、二六二冊確認できる。ただ、明らかに容所の旧蔵書と判別できても、「御風楼主人」印の無いものは計上していないため、実際の容所の旧蔵書の冊数はこれより



【写真3】国重文東濱口家住宅のうち御風楼（写真提供 広川町）

多くなると推定される。ちなみに蔵書印は、容所が明治四十二年（一九〇九）頃に広村の自邸に建造した木造三階建ての迎賓施設「御風楼」に由来する（【写真3】）。

容所は文久二年（一八六二）に広村で生まれ、九歳で

江戸に出て亀田鶯谷に漢学を学び、のち慶應義塾で洋学を修めた。家業の醤油問屋を拡大するとともに、鐘淵紡績（株）取締役、高砂製糖（株）社長、豊国銀行頭取などを歴任し、実業家として活躍した。また、衆議院議員、貴族院多額納税者議員にも選出され政治家としても活動した。

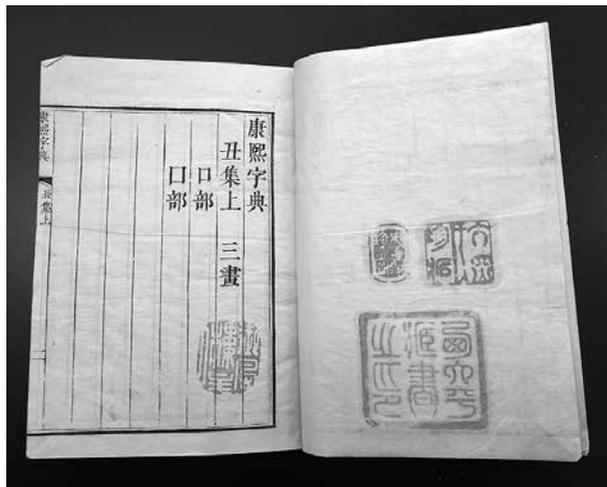
容所は基本的に東京で生活していたが、故郷広村に稽古場を創立した祖父濱口東江（七代吉右衛門）の遺志を継ぎ、明治三十年（一八九七）に耐久学舎舎長となった。同志社出身でエール大学に学んだ宝山良雄をはじめ、日本各地から良師を招き、莫大な私財を投じて校舎を新築するなど教育環境の拡充に尽力した。<sup>1)</sup> 明治四十一年（一九〇八）には耐久学舎から私立耐久中学校に改称し、自ら校主となって独力経営するなど、同校における「中興の祖」といえる人物である。

さらに、容所は詩文・書画を嗜むなど文人としても知られ、蔵書家でもあった。私立耐久中学校に寄贈された約一、三〇〇冊にのぼる蔵書のほとんどは江戸時代の版本であり、儒学の経典などの漢籍をはじめ、文学・歴史・地理・本草・医学・薬学・芸術など幅広いジャンルの書籍が含

まれている<sup>②</sup>。特に、中国清代の唐本『皇清経解』は、容所の遺愛の書であり、欠本があるものの正編三六〇冊中、二八八冊が現存している。また、最も出版年の古いものは、万治四年（一六六一）刊の刀剣書『古今銘尽』の初版本で、このほか一七世紀後半に刊行された和書も多く存在する。ちなみに、容所の旧蔵書の中には、押捺されている蔵書印によって、容所以前の旧蔵者が判明するものがある。たとえば、唐本『論語』、『毛詩』、『左伝』、『礼記』等には、「大垣文庫」の蔵書印が捺されたものが計一五三冊存在し、これらはもと大垣藩校の蔵書であったことがわかる。

ほかに、【写真4】のように、西大平藩大岡氏の蔵書印「西大平蔵書之印」・「大岡氏珍藏」の併印がある『康熙字典』（安永九年刊）、鯖江藩主間部詮勝の蔵書印「水山文庫」が捺された『英雄譜』、佐賀藩の支藩である小城藩の蔵書印「小城藩蔵書印」の捺された『尚書註疏』などがある。こうしたことは、旧藩関係蔵書の所在を知る上でも重要な事実であるといえる。

今回は容所の旧蔵書の概要について述べるにとどまった。より詳細な内容の検討については今後の課題とした



【写真4】『御風楼主人』と「西大平蔵書之印」、「大岡氏珍藏」の併印がある『康熙字典』

い。  
(2) 雁仁右衛門旧蔵書

広村の有力者であった雁仁右衛門が、明治三十九年（一九〇六）に耐久学舎へ寄贈した書籍である。雁家

は広村の旧家で、寄贈者の仁右衛門は、明治二十二年（一八八九）から同二十六年（一八九三）まで初代広村村長を務めた人物である。明治三十七年（一九〇四）には耐久学舎の舎員<sup>(13)</sup>を務め、維持費を負担するなど同校への支援を行っている。蔵書印は、「鷹埭氏図書記」、「雁竹桶」などがあり、七一冊が確認できる（写真5）。



【写真5】所蔵の履歴を示す印記。  
明治39年11月12日に雁仁右衛門から私立耐久学舎に寄贈されたことがわかる。

蔵書の内容としては、江戸時代の和書が中心であるが、特に荻生徂徠に関するものが多く、『徂徠先生学則』（享保十二年刊）、『論語徴』（元文五年刊）、『鈴録』（安政二年刊）などがある。

### (3) 有田郡郷校旧蔵書

現時点では伝わった経緯や時期は不明だが、「安諦郡郷賢図書之印」という蔵書印の捺された書籍が二八六冊存在することに注目したい。「安諦郡」は現在の和歌山県有田郡の別称であり、「郷賢」は和歌山藩の藩政改革の一環として明治二年（一八六九）から明治五年（一八七二）まで各郡に設置された郷校（郷学所<sup>(14)</sup>）であると考えられる。

『和歌山県教育史』によると、当時の郷校では、主に四書五経などを教科書とする漢学の教授が行われ、有田郡では湯浅村（現湯浅町湯浅）に石田冷雲<sup>(15)</sup>を総督として郷校が置かれていたようである。当文庫には、「安諦郡郷賢図書之印」が捺された『資治通鑑』、『詩経』、『春秋左氏伝』、『礼記』などの漢籍が多数存在することから、有田郡に置かれた郷校で使用された書籍の可能性が高い。

これらは明治五年（一八七二）、学制公布によって郷校が廃止された後、何らかの理由で移管されたものと考えられる。地域の教育史を考える上でも注目すべき事実であらう。

#### (4) その他の蔵書印について

現時点ではすべての蔵書印を解読できたわけではなく、未だ来歴が解明できていない書籍も多い。以下では、現在確認できるその他の蔵書印についても言及しておく。

まず、校名を記した蔵書印としては、古いものから「耐久社印」<sup>(17)</sup>、「私立耐久学舎図書之章」<sup>(18)</sup>、「私立耐久中学校図書」、「耐久中学校図書之印」などがみられる。これらの蔵書印や書き入れ、寄贈印などにより、どの時期にどのような書籍が所蔵されたかを判別することが可能となる。

特に寄贈が集中したのは、明治三十九年（一九〇六）～同四十三年（一九一〇）頃であり、この時期に広村の有力者である雁仁右衛門や西濱口家の濱口梧洞（十代儀兵衛、梧陵の孫）をはじめ多くの有志から書籍が寄贈されている。<sup>(19)</sup> この頃耐久学舎では、濱口容所と宝山良雄舎長を中心とした学校改革が行われており、その一環として、明治三十九年（一九〇六）に校舎が新築移転し、図書閲覧室が設けられた。<sup>(20)</sup> こうした学校施設の拡充に合わせて有志から多くの書籍が寄贈されたのであろう。

また、ここまで挙げた以外にも、紀州藩校学習館の蔵書印「学習館記」、紀州藩が伊勢松阪に置いた「松阪学問所」の蔵書印が捺された書籍も存在する。これらの書籍がいつ、いかなる理由で当文庫の一部となったのかについての検討も今後の課題としたい。

## 四 資料活用の取組

これまで「耐久梧陵文庫」の整理の経緯や文庫の内容についてみてきた。こうした学校所蔵資料を適切に保存することに加え、学校や地域で広く活用していくことが求められる。本章では耐久高校における資料活用の取組を紹介したい。

### (1) 地域向け報告会の開催―和歌山大学との連携―

資料整理の成果を地域に還元するため、平成二十九年（二〇一七）八月六日、整理作業を主導した和歌山大学橋本唯子准教授を講師として、「耐久梧陵文庫の世界」と題した報告会が開催された。講演では、作業の経緯や蔵書

の内容、資料活用の先行事例等についての紹介がなされた。また、作業に参加した生徒からの発表もあり、さまざまな角度から資料整理の総括が行われた。

当日は、地域住民や県内外の関係者ら六十余名が参加し、講演後も活発な意見交流がなされた。こうした報告の場を設けることは、資料整理の成果や資料の価値を地域と共有するうえで効果的な取組といえよう。

## (2) 校史資料室「耐久史学館」での展示

平成二十七年(二〇二五)十一月、耐久高校は、校史に関する資料の収集・展示等を目的とした校史資料室「耐久史学館」を校舎二号館二階に開設した。パネルや実物資料が常設展示され、地域への公開や生徒の学習にも活用されている。

耐久史学館では、後述する「和歌山県歴史資料アーカイブ」でのデジタル化資料の公開に合わせ、「耐久梧陵文庫」内の資料の実物展示を行っている【写真6】。

## (3) 「和歌山県歴史資料アーカイブ」での公開―県立文

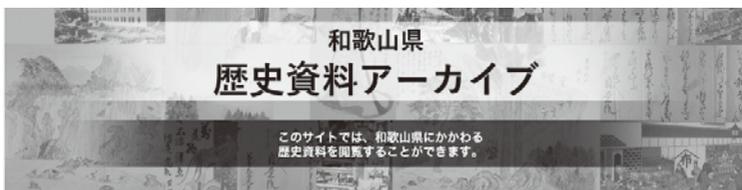


【写真6】耐久史学館の外観(上)と資料展示の様子(下)

## 書館との連携―

和歌山県立文書館では令和元年(二〇一九)度、「和歌山県歴史資料アーカイブ」サイトでの公開を目的として、県内の公立学校や公的機関を対象とした歴史資料の所在確認調査を実施した。その結果、すでに目録が整備されていた「耐久梧陵文庫」が収集・公開の対象となり、文書館が資料のマイクロフィルム撮影およびデジタル化処理を行った。

なお、「耐久梧陵文庫」は大部に及ぶため、全三、四六六冊のうちから、和歌山にゆかりのあるもの、濱口



資料を見る

古文書

行政刊行物等

写真・絵図

お知らせ

最新のお知らせ

学校所蔵資料の公開！  
和歌山県立耐久高校所蔵『耐久梧陵文庫』

令和2年11月6日  
古文書  
和歌山県立耐久高校所蔵『耐久梧陵文庫』を  
公開しました。

県立耐久高校には、江戸～明治時代の私塾（『頼まれた学』を中心とする私塾）の歴史を遺留が広がっています。その中心は、史料『頼口日記』の地で、明治期に活躍した美術家・政治家である濱口梧陵（ようしよ、1862～1918）をはじめ、地元の名方者から愛蔵されたものです。

これらは関係者の一人である濱口梧陵にちなんで、『耐久梧陵文庫』と名付けられています。地域の人の学校を支えてきた歴史を知ることができ貴重な資料群です。

※この写真は濱口梧陵の肖像印（関係者本人）

【写真7】「和歌山県歴史資料アーカイブ」トップページ

容所に関するもの、特に貴重なもの等の観点から、『貞観政要』、『落葉の錦』、『小学纂註校本』、『毛詩正文』、『古今銘尽』の五点（二二冊）を公開資料として選定した。

そして、令和二年（二〇二〇）が同校創設者である濱口梧陵の生誕二〇〇年の節目にあたることにちなんで、同年十一月五日の世界津波の日に合わせて、『耐久梧陵文庫』の目録データ、一部資料のデジタル画像、さらに公開資料の解説文を当サイト上に公開した（写真7）。また、同校が所蔵する耐久社「学則」（明治三年制定）も歴史的に重要であることから、あわせて画像を掲載している。デジタル化により、貴重な資料の保存とともに、幅広い活用が可能になった。

以上のように、耐久高校では外部機関と連携・協力しながら学校所蔵資料の整理と保存に取り組み、その成果を生かすよう努めている。そして筆者も教員、文書館職員双方の立場からこれらの事業に携わり、今後の資料活用に向けた道筋をつけることができた。文書館が令和元年（二〇一九）度を実施したアンケートによると、県内

公立全日制高校三十一校のうち、十八校に所蔵する歴史資料があると回答があり、資料の公開や活用を希望する学校も存在する。

文書館では、今後これらの資料が学校や地域において広く活用されるよう、学校をはじめとした公的機関と積極的に連携しながら、資料の収集・公開・活用等に協力していきたい。

## おわりに

学校には、業務上作成された公文書をはじめ、寄贈された書籍や古文書などの貴重な資料が残されている。これらの資料は単に学校の歴史だけでなく、地域の歴史を語るうえでも重要な価値をもっている。

しかし、近年では相次ぐ自然災害や学校の再編・統廃合などの中で、学校に所在する資料が破損したり、廃棄されたりする事例もあり、これらの散逸・消滅を防ぐことは喫緊の課題となっている。

一方で、歴史資料の評価・選別や取扱いについては専

門的な知識が必要であり、これらを学校のみで判断で行うことは難しいのが現状である。また、資料整理や目録作成については多くの時間や労力を要することから、学校と外部機関、地域との協力は不可欠といえる。さらに、現場の教員にとって歴史資料を活用することに対するハードルが高いといった課題もある。

現在文書館では、学校との連携を図り、資料の調査・収集やデジタル化を含めた資料の保存・活用の取組を進めている。学校所蔵資料の中には、社会科（地理歴史科・公民科）や国語科をはじめ、さまざまな教科の授業で教材として活用できるものも多く、地域史研究においても重要な資料となるものもある。

こうした資料を活用してもらうためには、学校に所在する資料の価値やその魅力をさまざまな機会を通じて積極的に発信していく必要がある。筆者は、教員と文書館職員の双方を経験した立場を生かし、学校現場との連携を密にし、資料の活用を促していきたい。耐久高校の取組は、学校所蔵資料の保存・活用に向けた一つの可能性を示すものといえよう。

注

- (1) 「和歌山県歴史資料アーカイブ」URL  
(<https://www.lib.wakayamac.ed.jp/monjyo/archive/index.html>)
- (2) たとえば、近年の学校資料に関する論考をまとめたものとして、地方史研究協議会編『学校資料の未来―地域資料としての保存と活用―』岩田書院、二〇一九年などが挙げられる。また、学校所蔵資料を扱った展示として、和歌山県立紀伊風土記の丘による企画展「学校にあるたからもの」(二〇一六)「学校にあるたからものⅡ」(二〇一八)などがある。
- (3) 耐久校史編纂委員会編『耐久校史』耐久高校同窓会、一九七三年を参照。
- (4) 濱口恵璋編『梧陵文庫蔵書分類目録』一九六〇年を参照。
- (5) 「耐久梧陵文庫」のうち、濱口梧陵の蔵書印「南紀広浦濱口儀兵衛所蔵記」が捺された書籍は、現在確認できる範囲で六冊存在する。
- (6) こうした背景には、江戸後期以降、広・湯浅地方において漢学が盛んであったことがある。また、耐久社では漢学教授が重視されており、明治三年(一八七〇)に定められた耐久社「学則」には、

学問ノ要ハ安民ニアリ、安民ノ本ハ修身ニアリ、先五倫ヲ明ニシ道芸ヲ学、大雅ノ風ヲ備ヘシ、読書ハ経書ヲ先ニ而、礼樂政治ノ大本ヲ体、歴史ヲ読而、治乱ノ跡ヲ弁、制度ノ沿革ヲ察、損益可知ノ政理ニ達ヘシ、訓話ハ漢儒ニ基、古言ヲ審ニシテ、課書経史ヲ精究シ、之ヲ身ニ得テ物ニ及ヲ要トス

とあり、当時の学生には、四書五経に代表される儒学の経書や日本の伝統的な典籍に通熟することが求められた。
- (7) 濱口家は代々、東濱口家(吉右衛門家)と西濱口家(儀兵衛家)の東西両家に分かれていた。東濱口家は広村に本宅を構

え、代々吉右衛門を世襲し、江戸日本橋において「廣屋」の屋号で醬油問屋を家業とした商家である。

- (8) 耐久高校には、昭和五〇年(一九七五)ごろに調査された「浜口容所文庫」と題する目録が記された手書きのノートが存在する。また、「和歌山県教育史」においても、これらの蔵書は「浜口容所文庫」として紹介されている(和歌山県教育史編纂委員会編『和歌山県教育史 第三巻 史料編』和歌山県教育委員会、二〇〇六年、一〇五一頁より)。
- (9) 広川町誌編纂委員会編『広川町誌 下巻』広川町、一九七四年、四一六頁を参照。
- (10) 宝山良雄(明治元年(一八六八)〜昭和三年(一九二八))：金沢生まれ。明治二十一年同志社普通科に入り、同二十九年卒業。同年九月、妙心寺花園普通学林に招かれて教鞭を執った。明治三十四年七月に米国に遊学、エール大学ラッド博士に学んだ。同三十六年五月に卒業後、ヨーロッパに渡り、米英仏独の教育事情を視察して同年十一月に帰国した。明治三十七年三月、杉村楚人冠(広太郎)の推薦により耐久学舎舎長として赴任し、大正二年まで務めた。(前掲『耐久校史』前掲『広川町誌 下巻』より)
- (11) 現在耐久高校の校訓となっている「真・健・美」は、容所が招聘した宝山良雄舎長が明治三十七年(一九〇四)に定めた教育の主眼を示す「真・美・健」の三綱領に基づいている。(前掲『耐久校史』より)
- (12) 特に冊数が多いのは医学書・薬学書で、「病名彙解」、「広惠濟急方」、「養生訓」などがある。ほかにも「増補華夷通商考」、「坤輿図識」などの地理書、「初学天文指南」などの天文書、「天

工開物」などの産業技術書、『大和本草』などの本草書をはじめ多様な書籍がある。

(13) 前掲『耐久校史』に写真版が掲載されている『明治三十八年十一月 私立耐久学舎一覽』によると、「舎員八本舎ノ賛助者ニシテ毎月規定ノ維持費ヲ支出シテ本舎ノ事業ヲ補ク」とある。

(14) 郷校（郷学所）は、和歌山城下に三か所、各郡に五か所ないしは十か所設置される計画であった。教育内容は主に四書、五経、左伝、史記などを教科書とする漢学であった。資金は藩費のほか地域有志からの寄附金によってまかなわれ、その郡における文教の中心として、郡内の人材育成をする高等教育機関として期待された。（和歌山県編『和歌山縣誌 下巻』和歌山県、一九一四年、四〇～四一頁、和歌山県教育史編纂委員会編『和歌山県教育史 第一巻 通史編』和歌山県教育委員会、二〇〇七年、七〇～七六頁より）

(15) 石田冷雲（文政五年（一八二二）～明治十八年（一八八五））：有田郡栖原村（現湯浅町栖原）極楽寺第十三世の住職。漢籍を野呂松廬に、詩を菊池海莊に学ぶ。京都に出て宋学を研究、また武術も極めた。のち極楽寺に戻り家塾就正塾（維新後は敬業家塾）を開き、読書と武技を教授。幕末には京都で志士と交流を持った。慶応四年（一八六八）四月、明治二年（一八六九）と明治九年（一八七六）～同十二年（一八七九）の二度にわたり耐久社でも教鞭をとり漢籍を講じている。（和歌山県史編さん委員会編『和歌山県史・人物』和歌山県、一九八九年、湯浅町史誌編纂委員会編『湯浅町誌』湯浅町役場、一九六七年、前掲『耐久校史』より）

(16) 前掲『和歌山県教育史 第一巻 通史編』七三頁を参照。

(17) 「耐久社印」が捺された書籍は、五一冊確認できる。すべて和装本で、『皇朝蒙求』、『纂註十八史略校本』、『日本外史』、『日本制度通』などがある。ただし、「耐久社印」の蔵書印が

捺された書籍の中には、耐久学舎と改称された明治二十五年（一八九二）以降に出版された書籍もある。耐久学舎と改称された後も当分の間、この蔵書印が用いられていたであろう。

(18) 耐久学舎時代の蔵書印は、「私立耐久学舎図書之章」と「私立耐久学舎図書」の二種類があり、二七九冊（洋装本九二冊・和装本一八七冊）が確認できる。

(19) 前掲『耐久校史』によると、明治三十九年（一九〇六）四月十九日に徳川頼倫（紀州徳川家十五代当主）が耐久学舎を訪問した際、生徒に対して講演することともに、「国史大系」、「続国史大系」、「群書類従」、「徳川実紀」などの図書を寄贈したと記述されている。なお、同タイトルの書籍は「耐久梧陵文庫」に存在する。また同じ頃、明治期から昭和期にかけての実業家・政治家である博文館の創業者大橋新太郎からも書籍の寄贈があった。

(20) 耐久学舎の校舎は、広村大道（安楽寺の隣）から同村西の浜（現在の広川町立耐久中学校校地）へ新築移転された。その際、旧校舎（現在の耐久社記念館）も新校地へ移築され、これを図書閲覧室として利用した。

(21) 公立全日制高校には、県立全日制高校のほか、和歌山市立和歌山高校及び海南市立海南下津高校を含む。